

アイルランドのエグザイルとウェイクについて

中 本 誠 一

I は じ め に

センテニアルという時間を通すことによって、現代文学に大きな影響を与えたジョイスの評価が変わるとは考えられないがジョイスも過去の人物になった感は否めないであろう。と同時にジョイスが描いた当時のアイルランド＝ダブリンも現在とはかなり変ってはいよう。勿論民族の流れとか民族の意識が100年足らずの中に簡単に変わるとは思わないが、徐々にではあるが変化していることは確かである。常に民族の独立闘争の中であってアイルランドが曲りなりにも自治国になったのは、ユリシーズが出版された年即ち1922年である。ジョイス自身世紀末に生まれ、アイルランド＝ナショナリズムの激流の中に育ったのである。

アイルランド人でありながらアイルランドという民族国家を持たず、アイルランド人でありながらアイルランド語が少数派になり、英語がその中心になった現実をジョイスは認識していた。「僕の御先祖は自分達の言葉をかなぐり捨て、別の言葉を選んだ」¹⁾ というように、ジョイスにとって英語は獲得した言葉であった。常に自分の国が存在して、自分の国以外のことを考慮に入れないで意志決定出来る人々——厚かましくも「同じ同国人ではないか」と他人に話しかけられる人々——の考えとは隔絶の感がある。さてヨーロッパ及びアメリカの人々からすれば、アイルランド及びアイルランド人に対する偏見が多少なりともある。その偏見は政治・経済・宗教・文化・言語等生活のすみずみにまで及んでいる。文化と教育を担っていたカトリックの布教禁止、1800年には全アイルランド

の90%以上の地域で話されていたアイルランド語が、1846年の大飢饉で10%以下に激減して、更に800万以上の人口が半分以下に減り、そして現在でも過去の人口の半分に満たない現実から人々が獲得したものはなんであったかを考慮する必要があるだろう。私達は英語の辞典の中でアイルランドに関する単語で無知、嘲笑、蔑視に関するものがなんと多いことかを知るであろう。従ってジョイスの描いた世界——人々の生活、歴史の中で民族の試行錯誤の様——がそれが真実であればある程、第三者からすれば偏狭と無知に写るし、アイルランド人自身には何故あのような民族の恥辱を描くのかという嫌憎に陥いる。センテニアルを迎えたからといってアイルランドの一般人がジョイスを好んでいる訳ではない。アイルランドで人々を敵に廻す最大の武器はカトリック、プロテスタントを問わず宗教である。この意味で、ジョージ・ムアーとジョイスは秀れた作家であってもアイルランドではポピュラーにはなりえないであろう。

ジョイスの時代も現在も人々と宗教とのかかわり合いは程度の差こそあれ同じ源流となって人々にのしかかっているのは事実である。ジョイスがユリシーズの中で攻撃したのはカトリックだけではない。プロテスタントにいたっては宗教であることの容認すらしない態度を取っている。ウォルター・マッケンが“I am alone”²⁾を書いた時、彼はアイルランド世論の反対にあった。一人のアイルランド青年がロンドンに出て、イギリス娘に出会い、恋をして結婚するストーリーである。勿論主人公の友人にしてI・R・A幹部の逮捕というストーリーにバラエティな筋を添えているが、問題なのはカト

1) Joyce James: A Portrait of the Artist as a Young Man, p. 207, Jonathan Cape, 1956.

2) Macken, Walter: I am Alone, Pan Books, 1978.

リック青年とプロテスタント娘との結婚である。異宗派間の結婚とそれに対する解決処理が問題なのである。この同じ作者が “Seek the Fair Land”, “The Silent People”, “The Scorching Wind”³⁾ を書くことによって The Greatest Artist なる賞称を受けたことは何と皮肉といえようか。前者の本音と後者の建前ともいえるアイルランド的態度である。

内在する諸相を外面的に取込むアイルランド人固有の生き様について、ジョイスが「肖像」の中で主人公スティーヴンに語らせた彼の武器 “Silence, Exile, Cunning”⁴⁾ とはアイルランドの意味でどのような内容であるかを考察することは重要なことだと思う。

T・C・D⁵⁾ のあの有名な図書館にアングロ・アイリッシュ作家の特別展示があり、イエイツと並んでジョイスの書簡が陳列してあった。そしてそのコメントに「肖像の中でスティーヴンは Silence Exile, Cunning について報告する筈であった。ジョイスは沈黙であったか。否、彼は多くの書簡を書いた」と傍評してあった。これら三つの言葉——Silence, Exile, Cunning——は「肖像」を論じる際に必ずといってよい程引用されるものであるが、ジョイスの伝記、作品の中でその内容が解明にされていない。又これらを“ジョイスの創造した三つの言葉”と称する研究者もいる。言葉を巧みに計算して緻密に用いるジョイスの作風からすると、これら三つの言葉はジョイスの作品の中でなんらかの意味を持たなければならない筈である。これら三語に対する一般的解釈は次の様である。(一)「肖像」の主人公スティーヴンの新しい芸術家としての決意であると同時にジョイス自身の大陸での生活を意味する。(二)アイルランドの土壌の中で発言しないで、大陸に身を置くことによってアイルランドを客観的に捉えることが出来る。

(三)言葉を武器とし作品の中にアイルランドの総てを表現するという意である。これらの言葉をジョイスの文学的姿勢論とする解釈である。

エルマンはジョイス論の中で、ジョイスの主人公達は遺恨をいだいた人物達で、とてもありえない青年、受動的成人、老練者達だ⁶⁾ と述べている。又ジョイスの作品の中で多く論及されるのは「ダブリナーズ」、「肖像」、「ユリシーズ」、「フィネガンズ ウェイク」である。ジョイスが自信を持って書いた戯曲「エグザイル」についてはあまり論及されない。このことは前者四作品はアイルランド及びアイルランド人そのものの生活と民族、民話をテーマとして使っているからである。ジョイスの最も秀れているものの一つは主題性であり、それは彼の作品の中で互いに密接にからまりあって一つの小宇宙を構成している。従って「エグザイル」を無視する訳にはいかない。私達がアイルランドの作家に接する時、忘れてはならないことはケルト的要素があることである。宗教問題も大きい問題であるがアイルランドの総てではなく、必ず受肉と化してアイリッシュの血の中に流れているケルト的要素があることである。アイルランド人は完全なる Dualism の民族で、一重に文学に限らず絵画、造型、造園等あらゆるものに「あるもの」が具表される場合ケルト的要素が表われる。

私は前述のジョイスの三つの言葉 Silence, Exile, Cunning を単にジョイスの文学姿勢論としてではなく、アイルランドの民族の流れの中から互いに密接な関連性を持って必然的に生じた民族の生き様であると考え次第である。アイルランド人なら誰でもそれらを熟知していることである。以下エグザイル、ウェイクについて述べるが、主として本稿を下記の書物に負った。アイリッシュ ウェイクは “Irish Wake Amusements”, “In Ireland Long Ago”, アメリカン ウェイクは “Ireland and the American

3) 3部作でアイルランド史の流れの中で重要な時代を中心に物語が展開する。主人公は Dualta という名前で各時代に登場する。

4) Joyce, James: A Portrait, p. 257.

5) Trinity College, Dublin. アイルランドでは大学名は T・C・D, U・C・D (University College, Dublin) と呼ぶ。

6) Ellemann, Richard: James Joyce, Oxford Univ. Press, p. 4, 1965.

Emigration 1850-1900⁷⁾ である。

II アイルランドのウェイク(通夜)について⁸⁾

17世紀から19世紀にかけてアイルランド各地で司教区会議(Synod)が開かれ、その会議で何回となく、「通夜」(Wake)と「葬式」(Funeral)に関して勧告が出された⁹⁾。その内容は多少時代によって異なっているが、人が死んだ時、あるいは葬式の時の泣き女による「泣き」についてと通夜の過度の飲食、お祭り騒ぎ、無駄な出費についてである。1670年8月のアーマー司教区会議の勧告では次の様な勧告がなされている。泣き女が泣き叫び金切声を上げるウェイクあるいは葬式にいかなる司祭も出席してはならぬ。更にかかる不適当な行為を中止させる努力を怠る司祭は教区から退去させるとも述べている⁹⁾。1660年1月のトゥアム司教区会議では、カトリック教徒のウェイクに出席した者はすべて飲食、馬鹿騒ぎ、人々を墮落させる違法な風習を止めるよう指令している。又聖職者は人々を説き伏せてウェイク及び葬式で浪費する金を少なくともその大部分を、故人のためとかその他貧しい人々に献上させるよう勧めている¹⁰⁾。

ウェイクという風習はヨーロッパ各地にあったが、特にアイルランドの風習は根強く続いた。これは後述するがアメリカへ移民する人々と家族、親類縁者、友人、近所の人々との最後の別れの儀式と結びついたからである。18世紀から19世紀末にかけて夥しいアメリカ移民によってどんなにこの風習(アメリカン ウェイク American Wake)が盛況であったか想像出来

よう。このウェイクがどんなに非キリスト教的であるかは上述の司教区会議の勧告からも理解出来よう。今日ではアイリッシュ ウェイクは殆ど消滅してしまっているが、コーク及びドネゴルの西部(主としてアイルランド語地区)でわずかながら存在しているといわれる。

人々の死者に対する概念はキリスト教の教えによって魂は造物主に戻され、魂の抜けた肉体は尊崇して埋葬されるべきであると悟された¹¹⁾。しかしアイルランドにおいては、古い異教的考え即ちケルト的要素が根強く人々の生活、風習の中に生きつづけ、死後も存在すると信じていた。これはまたフォークローとして捉えることが出来よう。あるものは異教(pagan)時代に派生し、またあるものはキリスト教と混成しその影響を受ける。そして人々の精神と思想を方向づける流れがその根底に根付き、新しい概念を容易に受け入れることを妨げるからである。

死者が出てウェイクの準備が近所の女達によってなされるまで泣いてはならないことになっている。民間信仰によると悪霊の守犬共が死者の魂が去るのを待っていて、親類縁者の早まった泣き声によって眠りから目覚めるからだと言われている。もし父親が死亡の場合妻あるいは成人した子供が喪主となる。ウェイクのレイアウトはウェイクの経験のある近所の女数名によってなされる。泣くことは死亡から3時間たつまで許されない。死装束(habit)¹²⁾をさせ、遺体を安置するベッドを用意する。男の場合は死装をする前に髭をそる。胸に十字架を置き手にロザリオを持たせ、ベッドにシーツをかけローソクを灯す。大体2時間位で出来上る。死者が晩に出た場合、その知らせは広がらないので近親者だけが集まる。もっともアイルランドにはバンシー(Banshee)という家に死人の出た場合恐ろしい泣き声(caoine=wail)でそれを近所に伝える女の妖精がいる。このことはウェイクがあることは意外に早く伝わるという意味であろう。一般にアイルランド人は極めて集団

7) O Súilleabháin, Seán: Irish Wake Amusements, The Mercier Press, 1969.

Danaher, Kevin: In Ireland Long Ago The Mercier Press, 1969.

Schrier, Arnold: Ireland and the American Emigration 1850-1900, Univ. of Minnesota Press, 1958.

8) Synod of Tuam (1631, 1660), Armagh (1660), Dublin (1670), Armagh (1670), Meath (1686), Leighlin (1748), Dublin (1730) Leighlin (1748), Cashel and Emily (1782) 他.

9) Irish Wake Amusements, p. 138.

10) Ibid, 147.

11) In Ireland Long Ago, p. 169.

12) habit を着せる。habit は修道士、修道女の衣服。

性の強い民族だといわれている。集団性というより群居性といった方が正しいかも知れない。死というものが身近に発生した場合 communion の必要性と特に感じるといわれる。家族の誰かの死去で近所の人々から慰めを求めざるを得ない。この場合人々は「早くお悔みを」と遺族の心を慰めるために殺到する。朝早く二人の男が近くの町にウェイクに必要なものを買うに行く。棺（昔は地方の大工が造った。）を注文して飲食に必要なもの、パン、肉、パッチーン¹³⁾、ウイスキー、ワイン、スタウト、パイプ、タバコ、嗅ぎタバコ等を買って戻る。ウェイクではクレイパイプにタバコを詰めて出される。そしてタバコや嗅ぎタバコを受け取る人は次の様にいう。死者の霊に神の祝福を！
(The blessings of God on the soul of the dead)¹⁴⁾。

教区の誰もが死者に哀悼するのでかなりの群衆となる。その家に入ると遺体に跪いて祈る。お悔みを述べてから弔問客の中に入る。勿論老人とか、若い人とか、一家の主とか、死者の立場によってウェイクの雰囲気が変わる。老人の場合には葬儀が一段と華やかになる。物語が語られ、歌が歌われ、ゲームが行われる。死亡時刻がわかるように時計が止められ、遺体は一番大きな部屋（台所）に安置される。時には納屋のこともある。今日のように必ずしも寝室ではない。キャンドルが近くに灯され、嗅ぎタバコが遺体の上にも置かれる。タバコのことは先に述べたが、吸えても吸えなくてもふかさなければならぬ。女性にも望むなら嗅ぎタバコが与えられる。ある地方では嗅ぎタバコの残りを集めて頭痛とか咽喉の痛み止めに用いた。食物、飲物、タバコ、嗅ぎタバコは貧しい人々にも与えられる。故人の着物も貧しい人々に与えられる。

死者の友人、親類の人々は葬儀の後の日曜日（3週）のミサに新しいスーツを着るのが一般

的である。この目的のために背広が新調される地域がある。それは死者は死後しょう洒な服を着るという考えである。伝統的風習では遺体はウェイクの期間中誰かによって見守られる。弔問客は遺体に進み、跪いて静かに祈る。それから親族に哀悼の意を表わす言葉「ごしゅうしょう様です。」(I'm sorry for your trouble) と故人について丁寧に述べて離れる¹⁵⁾。弔問の行き帰りは一人ではなく複数です。グループで行き帰りする方が良いとされる。食物、飲物が出される所は台所か、天候が良ければ外でウェイクする。そして人々は夜半までいる。雇う泣き女¹⁶⁾は四名で遺体を置いたベッドかテーブルの上に一人、足元に一人ついてキャンドルを見守る。両サイドに一名ずつつく。ロザリオの祈りが夜二回、夜中に一回捧げられる。その際家のどこにいても跪いて祈る¹⁷⁾。アイルランド各地でいつも聞くのは死者への慟哭の歌 (Caoine) である。遺体のすぐ前に立って死を悲しみ死者を覚めさせる。そして親族の人達、泣き女がコーラスする。代表的歌の一つは次の様な歌である¹⁸⁾。（アイルランド語で歌う。）

父よ、あなたは私達を残して	オッホン
何故私達を後に残したのです	オッホン
私達が何をしたというのです	オッホン
それであなたは逝ったのです	オッホン
あなたはとても物持ちでした	オッホン
どうして私達を残したのです	オッホン

(全員)

オッホン	オッホン	オラゴン	オー
腕ぶしは強く	オッホン		
歩みは軽やか	オッホン		
手先きは器用	オッホン		
あなた無しではとても貧しい	オッホン		
何故私達を後に残したのです	オッホン		
私達が何をしたというのです	オッホン		

13) パッチーン (potteen): ジャガイモから蒸留した焼酒。現在は密造酒で中心地はドネゴール、ゴールウェイの沼地とか山岳部である。

14) Ibid, p. 15.

15) Ibid. p. 15.

16) Ibid. p. 136.

17) Ibid. p. 15.

18) In Ireland Long Ago, p. 174.

オッホン オッホン オラゴン オー¹⁹⁾

アイルランドに次の古い格言がある。「ウェイクでは歌を歌え、子供が生まれたら涙を流せ」(Sing a song at a wake, and shed a tear when a child is born)。この奇妙な格言にアイルランドの人々の特徴が表現されている。「子供が生まれたら涙を流せ」は生まれた子供が必ずしも成長するとは限らない。成長したとしても赤貧の中で苦汁に耐えなければならない。アメリカン ウェイクに見るように生きながら告別のウェイクをしなければならないからだ。「ウェイクでは歌を歌え」は楽しいウェイクを意味している。若死にだったり、傷ましいケースの場合はウェイクに歌もゲームもない。或る教区の若者は老人の死を待望んだという。それはターフ投げやたわいのない遊びの一夜を与えてくれるからだという²⁰⁾。アイルランドのいたる所で物語が語られた。普通台所の片すみで年寄りの男が人々に囲まれながらアイルランド語で語る。これらの話はアイルランド文学のローカルな伝統をなすものである。従ってウェイクで物語が話されることに司祭、神父はなんら非難してない。長い夜の時間を費やすのに、物語は眠くなるのを防ぐのに役立ったと思われる。ウェイクでの歌²¹⁾は主として恋愛歌、愛国歌、宗教歌が歌われた。その代表的なものは、“Ballylee”, “The White Miller”, “I had Three Sons”, “Éide Ireland”, “The Brown-haired Boy” “The Redhaired Girl” である。しかしウェイクでの最大の楽しみはゲームであつたらしい。“Contests of Strength”, “Lifting the Corpse”, “Lifting a Chair”, “Pulling the Stick”, “Breaking an Egg”, “The Stronger Hand”, “Wrestling”, “Contests in Ability”, “Forfeits”, “Horse Fair” “Hunt the Slipper” 等 色々なゲームがある。代表的

なゲーム²²⁾は “The Bees and the Honey” で、これは道化が一人選ばれ、中央で丸椅子に坐ってワラで覆われる。若者達が蜂になり水を口に含み蜜を求めて飛びまわる。それぞれ口に含んだ水を道化にかけて、水浸しにする。ダンス (アイリッシュダンス) は単複リール、ジグ、ホーンパイプ等が行われた。ダンスについて大変興味深い記述がある²³⁾。ある巡回布教師は大変人気があつて人々にダンスを教えた。そのダンスの先生が亡くなったので、数晩ウェイクをし更に近くの教区の人達が自分達の所に運んでウェイクをした。日本の看々踊りよろしく遺体をダンスするために時々連れ出したという。

楽しいウェイクが終わり最後に棺が家から運ばれる前に、総ての出席者は坐って面前で食事を取る。これは自分の仲間と最後の食事を意味する。その後蓋をしないで棺は外に運ばれ、親類縁者・友人が最後の別れをする。泣き女も最後の号泣をする。四人の親類の者が棺を担いで出発する。一方近所の女が残り、棺が出るやいなや家の窓を開けて遺体を置いた寝具を振るう。時計を元に戻してウェイクの跡が残らないように掃除する。そして皆が戻ってくるための食事の準備をする。

伝統的葬列の順序は次のようである²⁴⁾。

1. 4人の男に担れた棺 (近親の一番近い者が始めに担ねばならない。)
2. 男の一団
3. 女の一団 (もし参加して歩きたい場合)
4. 乗物 (二輪馬車, 荷馬車)
5. 最後に馬に乗った男

始めは直接棺を運んだが、徐々に埋葬の前日の晩に教会に運ぶようになった。家から教会までは普通晩であつた。それは昼は農家の場合野良仕事があり夕方は家畜の世話で遅い方が都合がよかったという。誰もが一番良い服を着て、親類の一人が葬列の出発前に何人かの人に喪章を渡して帽子につける。道で葬列に出合った時

19) Ochon: Woe is me! Ullagon (olagan): act of wailing.

20) Ibid. p. 26.

21) Ibid. p. 29.

22) Danaher, Ibid. p. 175.

23) Ibid. p. 31.

24) Danaher, Ibid. p. 178.

は下って葬列を通す。歩行者は葬列の先頭が通り過ぎるまで脇に寄り、それから少なくとも二・三步葬列の行進に参加する。決して葬儀参列者の数をかぞえない。数をかぞえることは自分の葬儀を意味した。その代り車は数えた。車はカートでもなんでもカーであった²⁵⁾。葬列が近づくとき家の入口を閉めて窓やカーテンを引く。村では店の入口と窓を一つ閉める。葬儀の行進では近道は許されず、必ず本道を通る。雨はむしろ吉とされ悪天候でも中止はしない。

教会の門から墓地に直接運ばないで、境界の壁に沿って南から東西に運び神父が祈っている間に頭を北に向けて埋葬する。

埋葬は葬儀の重要な一部である。墓掘りは前日の晩に近所の男が2, 3人ボランティアとなって掘る。その際物知りが指導して場所を決める。日曜日の晩以前に芝切りがされない場合、夜とか月曜日には決して墓を掘らない。墓を掘ったら、クワかシャベルを墓に十字に置いて棺を降すためのロープを張る。それから墓掘人達は家に帰り着替して戻る。棺を降して土をかぶせる仕事をするためである。アイルランドのいくつかの地域では、墓に一番新しく埋葬された死者がその墓場の総ての死者に召使いとして司えなければならないという。そして新参者は近くの井戸から毎晩水を汲んでくることがその仕事とされている。従って同時に二つの葬儀がある場合は競って埋葬したという²⁶⁾。

Ⅲ アイルランドのアメリカン ウェイクについて

前述の通りウェイクは死者と生ける者との最後の別れの儀式であると同時に宴の場でもあった。この種風習はアイルランドに限ったことなくヨーロッパの各地に見られたことである。しかしアイルランドのウェイクが特に特徴あるものとなったのは、膨大な数の海外移住による結果生じた別れの儀式即ちアメリカン ウェイク

と混合したことである。海外移住²⁷⁾は近代アイルランド史の中で非常に連続的に起った現象で、その影響はアイルランドの人々の生活のすみずみにまで及んでいる。その影響は特に農村の人々の生活、風習、伝説、バラードに及んだ。アメリカン ウェイクがいつ派生したか確かでないが、1830年代初めの移住が増大し始めた頃であろう。移住が広範囲にわたって増加し、この風習が大飢饉で色々な形式を取ってアイルランド全土に広がった。特に移民が多い地域、南部、西部及びドネゴールに多く、アルスター及び東部の諸県には比較的少ない。この風習は一般にアメリカン ウェイク (American Wake) と呼ばれているが²⁸⁾、キルケニーとティパラリーではライブ ウェイク (live wake)、ウェクスフォードではパーティング スプリー (parting spree)、デリーとアントリムではコンヴォイ (convoy)、ゴールウェイの一部ではフェアウェル サパー (farewell supper)、メイオのアイルランド語地区では門出祝い (The Feast of Departure)、ドネゴールではアメリカン ボトル ナイト (American Bottle Night) とかボトル ドリンク (Bottle Drink) といわれた。19世紀後半にイギリス、ドイツもアメリカ移住にかなり寄与しているが、アイルランドのアメリカン ウェイクに較べるべきものは何もない。同じ移住でもオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、カナダに対してはアメリカン ウェイクと呼ばれたが、イングランド、スコットランドの場合はこの名称は使われなかった。ウェイクの本質的な意味である“通夜から埋葬まで死者の側で見守る”ことが、アメリカへ移住する人々（特に若い息子と娘）と生きながらの告別することが一致する。アメリカン ウェイクが芽生えた初期の頃は泣き女も呼んで行われた²⁹⁾。それは移住者とその両親、兄弟、姉妹の苦しみに対する賞徳であり、鋭い刺すような調子の慟哭の効果は耐えがたきものであったと

25) Danaher, Ibid. p. 177.

26) Danaher, Ibid. p. 172.

27) Schrier, Ibid. P. 83.

28) Schrier, Ibid. p. 86.

29) Schrier, Ibid. p. 87.

想像できよう。

アメリカン ウェイクは現実の死という葬儀ではないがその象徴となった。初期の移住では旅は遅く大変な月日を要した。移住者が再び戻ってくる見込みは殆どなかった。この様な状況のもとで若い息子、娘達のアメリカへの旅立は、移民船³⁰⁾、病気の不安、アメリカでの生活の不安以外の何ものでもなかった。多くの場合それは死を意味していた。従って死者に対する儀式が家族とか村社会からのエグザイルに転用されたと考えられる。幾度となく繰返される飢饉の中で一番被害を受けたのは農村部であり、特に西部、メイヨ、ゴールウェイ、ドネヨールは貧困が極端で、ウェイクの食物、ウィスキー、ポーターは勿論のこと、一般的習慣であるお茶を供する余裕すらなかった。女達はそのためにパンを焼き、清掃する。貧しい場合は近所の人々が卵、パン、ジャガイモを、男達のためには酒樽を用意する。その余裕すらない場合は各人が自分の飲み物を持参する。資金をカンパしてパッチーンを買う。これを「運集め」(lifting a ccess)³¹⁾と呼んだ。ウェイクの費用とか船賃がアメリカにいる兄姉、親類から送られる場合が多い。アメリカに移住して借りた金を返し、弟妹、親類、部落の人を呼ぶために金を送る。

ウェイク同様、家の中で一番広い部屋即ち台所でアメリカン ウェイクが行われる。家具が取り払われ、椅子が壁に寄せられ宴となる。人々はアメリカのことやすでに渡米している友人のことを話題にしたり、アドヴァイスをしたり、アメリカにいる友人、恋人への伝言を頼んだりする。歌は大体別離の苦しみ、両親の悲しみ、移住生活の困難さに関するバラード³²⁾である。“Farewell old Erin”, “The Emigrant’s Farewell to Donegal”, “The Irishman’s Farewell”, “The Irish Emigrant”, “The Shores of Americay”が多かった。普通アメリカン ウェイクは夜のとぼりが降りると始ま

り、移住者が出発する朝まで続いた。秋、冬は8時頃から、春、夏は10時頃から始まる。朝といっても季節とか、駅までの距離とか船着場とか乗物の時間によって違った。ウェイクの前日か前の週に、若い移住者は自分が去るにあたって知らせたい人とか別れをしたい地域の友人、近所の人々にふれてまわる。この種の訪問はアメリカン ウェイクのインフォーマルな招待である。時には出発を知らせられなくても、アイリッシュ特有の噂が広まり、然るべき人が集まるのであった。

移住者が最後に家を出発する前に家族そろって食事をする。それから家族、友人、親類、近所の人々に見送られて出発する。この時若い人が一緒に船着場とか駅まで送る習慣があった。遠い場合ある特定の岡とか十字路まで送る。これは「野辺送り」(convoy)³³⁾として知られる。「野辺送り」の背後にある意味は限りなき楽しいアイルランド大地で最後の時を過すためである。ある地域ではそれは移住者にとって「幸運」と考えられた。又ある地域では convoy はアメリカン ウェイクの全部を指す名称を意味したが、これは一般的でない。ケリーでは変形して出発する前に「ヤンキー」(Yankee)と呼んだ。そしてこの風習を「ヤンキー送り」(Convoing the Yankee)として知られる。

IV オフラハティーのウェイク描写

アングロ・アイリッシュ文学の中でジョイスの「エグザイル」を別として題名にエグザイルを入れているのは、ジョージ ムアアの“Exile”とリーム オフラハティーの“Going into Exile”である。フランク オコーナは二人の作品について次の様に解説している³⁴⁾。ムアアは真に宗教の権威主義に対するアニユイに移住が主に起因するという事実を無視出来ない。一方オフラハティーはエグザイルの本質——すべての人は愛と死同様に何らかの方法で耐えなけれ

30) 移民船での死亡は数十万人を越えたといわれる。

31) Schrier, Ibid. p. 88.

32) Schrier, Ibid. p. 95-96.

33) Schrier, Ibid. p. 89.

34) O'Connor, Frank: ed. Modern Irish Short Stories, The World's Classics, p. xii, 1977.

ばならないある形態——以外総てを無視する。ムアーの宗教権威に対する嫌悪は彼の作品全般に流れるものであって、アイルランドでポプラーになり得ない理由である。彼は移住とかアメリカについて作品の中で、アイルランド人は皆アメリカに移住してしまうとか、教会建築の資金不足をアメリカに頼る神父の言葉が割合多く出てくる。ムアーは1852年メイヨで富豪の息子として生まれ18歳までアイルランドにいた。したがって貧しいメイヨの人々がアメリカに移住せざるを得なかったことも、又それに伴うウェイクの事も熟知していた。オフラハティーは1897年アラン島に生まれ神父の推めでUCDに学ぶが、神父としての天賦の才の無いことを悟り大学を去る。“Going into Exile”は作品そのものがアメリカン ウェイクである。前述したウェイクとアメリカに移住する人々の最後の生きる死別を象徴する内容である。

小作人フィニーの小屋は人々で一杯であった。大きな台所には男も女も子供達も壁に並び、長椅子や椅子に坐っている。中央では三組程がジグを踊っていた。パット ムラニーはアコーディオンを弾いたので汗を拭いている。何か無理を装った騒しい陽気さの中で、人々はダンスをしたり歌を歌ったり笑い声をあげている。しかし本当の理由を隠すことは出来なかった。その翌日アメリカに旅立つパトリック フィニーの二人の子供メアリーとマイケルの為のウェイクだからである。

フィニーは人々に歌やダンスをするように急ぎ立てるが、心は二人の子供と決して再会はないという思いで終始塞ぎ込んでいた。病気の子豚の世話をする振りをして外に出る。始めて新調したサージの服を着たマイケルも出てくる。「お父さん、ネット叔父さんは親切にもダンスの費用を貸してくれたんだよ。僕らは何も持たないで行くのかと思うと嫌になるよ。他の人達と同じにね。お父さん、メアリ叔母さんに船賃を返す前だって、稼いだ最初のお金を送るからね。借金を四カ月で払って、それからクリスマス

スまでに又送るからね。」とマイケルは男らしく話す。「お願いだから弱気にさせないで下さい。」「誰が弱気にしている。」「お前が新しい背広を着たお陰でおかしくなったのではないかと心配しているんだ。俺が春カゼで寝込んだ時お前がやったジャガイモ畠のことを考えているんだ。神様があなたのためにお造りになった土地から、お前を奪うなんて酷いこった。」「この土地から貧困と辛い仕事とジャガイモと塩以外何を得たというんです。」二人は沈黙してそれから抱き合って泣いた。

大きな部屋ではフィニー夫人が二人の娘と親類の女とでお茶や食物を給仕していた。長女のメアリーは数人の友達とベッドにいた。友達是不安定な姿勢でメアリーを取囲んでいた。それは慣習で自分達はどんなにメアリーを好いているかを示していた。兄と違ってメアリーはアメリカに憧れていた。金のことは考えずただ外国の大きな家とか恋のことを考えた。メアリーは幾分父を恐れていた。ある時ボーイフレンドのバートリーが腰に手を廻してキスをしたことがあった。父に目撃されて柳の杖で打たれたことがあったからだ。年寄りの百姓女が「こんな別嬪さんを他に行かすなんてインベララ島の恥だわ。もし私が青年で彼女を行かせるなら、奪ってもらうね」と冗談をたたくのだが笑いはすぐに消えてしまう。フィニー夫人も夫と同様子供のことを理性的に考えられない。メアリーは母がいつもあんな風にヒステリーを起こす時に笑うことを知っていた。メアリーは眠れなかった。「もう明るくなったね」と誰かが言う。朝の野良仕事をしに家に帰りまたキルマラジの船着場に見送りに来てくれるだろうとメアリーは思う。母親は眠るように促したが、子供たちはダンスのことや出席した人達のことだけを話題にした。フィニー夫人は自分の巣宿にいる子供達といるのが一番良いことだと考えるのであった。

フィニーの家庭には6人の子供がいる。マイケル20歳、メアリー18歳、双子の娘16歳のジュリアンとマーガレット、ブリジッド14歳、末息子トーマス12歳。7時の朝食に門出を祝

って卵を食べた。人々が見送りにやって来た。小屋は激しく泣く声で満ちあふれていた。夫人は右手でメアリーの肩を掴み、左手でマイケルの首筋を掴んでいた。一張羅を着込んだ父が「もう時間だぞ」といって聖水をかけた。彼等は十字を切って部屋を出る。二人共トーマスにキスして出発する。皆も後に続く。庭から道路へと葬儀のようであった。夫人とトーマスと二人の女が後に残った。夫人は台所で何か失したものを探しているかのように眺めていた。突然両手を空に上げ庭に向かって走った。「戻っておいで。戻っておいで」と叫んだ。二人の女が台所に連れ戻した。「時が癒さないものはないですよ。」と一人が言った。「そうですね。時間と忍耐ですわ。」ともう一人が言った。

この短編小説はオコーナーがいみじくもウェイクの本質であると解説した通り、ストーリーよりもウェイクの描写が大切なのである。生き生きとしたウェイクの準備と踊りの様子、楽しい装いの裏にある耐えがたき陰うつな感情、親子の錯綜する複雑な心理、移住する国への不安と憶い、後に残る人々への配慮、出発に伴う差迫った時間内での決断と行動等巧みにウェイクの手順に従って描写されている。まさにアイルランド短編小説の面目躍如たるものがある。

V む す び

当時のアイルランドの人々の生活が実際どのようなものであったか、特に貧しい人々の中でも貧民 (pauper) といわれる人々がどのような生活をしていたかを私達は「ハンフリー オサリヴァンの日記」³⁵⁾によって断片的であるが知る事が出来る。アメリカン ウェイクをする余裕の全くない人々がいることに気づくであろう。当時の農村部の人々は墓に移住かのどちらかを選ばざるを得なかった。現在でもアイルランドの人々の1/3の家庭はなんらかの形でアメリカ

に親類があるといわれる。カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカを加えれば更にその比率は高まるであろう。“Exiles”の中でリチャードがエグザイルについて「エグザイルには経済的なものと精神的なものがある。人が生きんが為には糧を求めて自国を去った人々。他に民族の生命を維持せんと精神的糧を求めて他国に去った人々、否、その国の最も好ましい子供達だ。」³⁶⁾と述べている。これは陳腐な表現といわざるを得ない。なぜならアイルランド人にとって当然のことだからである。アイルランド史における最初のエグザイルはキリスト教初期の聖クルムキユ (St.Columcille) で、彼程秀れたエグザイルはいない。

ウェイク、アメリカン ウェイク、エグザイルの不可分の関係を考察した。スティーブンの武器 Exile は決してジョイスの専売特許ではない。Silence 及び Cunning も同様である。Silence と Cunning は一対をなす言葉であり、アイルランド人がその歴史の中から必然的に得た民族の生き方の一つであるといえよう。「通夜といって夜を徹して馬鹿さわぎをするのが向うの風習らしい」という言葉で済ますことの出来ない事実を考察した。アイルランド人であれば誰でも “Finnegans Wake” にはティム・フィネガンが何故登場してアイリッシュ アメリカンと関係があるのかすぐに理解出来る。同時に彼等はウェイクから “Wake of Barney Brallaghan” のバラードも連想出来るのである。

Summary

In “A Portrait of the Artist as a Young Man” the resolution Stephen immediately put into execution is to use silence, exile, and cunning. He did not report how to use his weapon in his later life. A Joycean calls it Joyce’s invented three words. This is a very stereotyped expression. Every Irish knows the three words. The Irish

35) Bhalldraithe, Tomásde : translated. The Diary of Humphrey O’Sullivan 1827-1835, The Mercier Press, 1979.

36) Joyce, James : Exiles, p. 99, The Viking Press, 1966.

eventful past was an Irish storehouse of unforgettable wounded memories which so much enriched her days of her hard routine. Through the true meaning of Irish wakes

and American wakes we find exiles became a part of their daily consciousness. The three words are not only Stephen's weapon, but the Irish one.